

## 喜んでもらえることが、わたしのやりがいです



**佐藤俊一さん**

33歳からエレキギターをはじめ、その後プロ歌手のバックバンドを勤めるなど活躍。現在まで介護施設など約30カ所以上で実演している。

佐藤さんのギターから昭和演歌のイントロが次々と流れてきます。

「毎日、100曲から150曲は練習しています」

さらりと笑顔で話す佐藤さんですが、軽やかな指さばきはたゆまぬ努力のたまものです。

「40年くらい前にダンス喫茶で歌手のバックバンドとして出演したのが始まりでした。以後バンド活動をしてきて、たくさんの人たちに喜んでもらえたので、地域のお役に立てればと人材バンクに登録しました」

イントロクイズは、バンド演奏の合間に弾いてみたら、お客さんにとっても喜ばれたのが始まりとのこと。

「みんな曲を聞くと、その曲が流れていた時代に帰れるんですね。だからイントロだけでなく、その曲全部が弾けないとだめなんです」

佐藤さんは病院や介護施設などで演奏を希望しています。

「演奏に行くと、聞いているお客さんが涙を流して握手してくれるんです。それがわたしのやりがいにも繋がります」



## 必要としてくれる人に 出会いたい

ゴルフボールを3個、直線上にガムテープで貼り付けた名付けて「足裏コロコロ」。

渋川さんが足裏の下に置いて実演してくれます。

「簡単で、誰にでもできる運動が大事なんです」

今では市の介護予防事業など忙しく活躍する渋川さんですが、初めてあんまでお客さんの体に触れたときは責任の重さに体が震えたそうです。

「怖くて、自信が持てなかつたんです。でもあるときがんで亡くなられた方が、病院でもわたしが伝えた運動をやってくれていた、って遺族の方から聞いて、少しずつ自信が持てるようになりました」

渋川さんは「教科書は患者さんの体」という指導してくれた先生の言葉を大切にしています。

「患者さんから教えられることが多いです。だから出会いが面白いんです」

今後、人材バンクで伝えて行きたいことをたずねると「体に対してやった努力は報われるということですね、努力は裏切らないです。わたしを必要としてくれる人にぜひ出会いたいですね」と、笑顔で話してもらえました。



**渋川貴子さん**

厚生労働大臣認定 健康運動指導士。群馬県スポーツ指導者。介護予防教室や健康体操、腰痛予防、産後ママの体づくりなど幅広く活躍している。



## 色々な人たちの 居場所を作りたい



**宇佐見義尚さん**

大学で近代・現代日本経済思想史などの講義を担当し、退職後は子どもや高齢者の交流の場として「ジジババ子ども食堂」を開催している。

さわやかな風が吹き抜けるデッキ風の「カフェ南ヶ丘」。地元出身の宇佐見さんは、この場所で、子どもや高齢者を対象にジジババ子ども食堂を始めました。「夢中でやってきたことが、今になってすべて結びついてきています」

宇佐見さんは、元々障害者施設で仕事をしたあと、大

学教授となりました。

「最初についた先生から与えられたテーマがマックス・ウェーバーの研究だったんです。何か理由があったというより、そのときは夢中でやるしかなかったという感じです」

夢中でやっていた研究が、社会教育としてジジババ子ども食堂まで不思議にネットのように結びついてきたと感じるそうです。

人材バンクでの活動、抱負を伺いました。

「色々な人にこの場所を利用してもらいたいです。特に子どもたちは社会の宝です。ここで本を読んだり、勉強したり、静かにコーヒーを飲んだり…色々な人たちが自分の居場所として利用してくれると嬉しいです」

